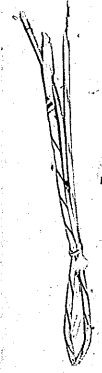


から考へると、グンく製造されて行く商品は買手が減つてくるために、通割生産による損失  
 アタルことになるのは当然である。この時、資本家は、労働者が飢死するまで、賃銀を  
 とめぬ生産費をせめて、外国商品との競争に勝利を得ようとするであろうし、  
 労働者は、日本資本  
 的競争の道を前進してゐると云ふ理論は成り立っていない。  
 (日本資本) 競争の地は永遠に、競争を許さずして、雷鳴を招き、  
 一労働者の生活は向上したであろうか、労働者の賃銀の動きと、物価の値上りとを  
 みる。

定額賃銀	八八、一	実収賃銀	八八、一	小賣指数	六九
平均	八五、一		八九、二		七三

物価は七年から八年に四上つてゐるのに、実収賃銀は二上つてゐるにすぎない。物価の値  
 銀との差があることは、結局労働者の賃銀が切り下がり水とと同様であつて、労働者の生活  
 になることには、従つて労働者は生活ヨウゾの斗争に打ち上つてゐる。之を争議についでみると、  
 一九二八年 九万八千八百五十六人 八年 一六三八件 十万二千六百六十二人  
 に於て争議の件数が減つてゐるのは、非常時の美名の下に労働者は眠りにませられ、また、  
 護身争と対して、資本家階級の恠怒を、彈圧が下され勝ちによるものである。  
 争議数のうち、賃銀値上を中とする、要求斗争は、七年の三五四件から



更に商品の  
 力(競争)  
 性は、  
 十リ加

ケロと国外の新市場に求むるために  
 入ることを、  
 外内と  
 外内と  
 外内と  
 外内と